

報道発表項目の概要

白血病や悪性リンパ腫などの造血器腫瘍や、重症再生不良性貧血、先天性免疫不全症などの難治性疾患に対する根治療法として用いられている骨髄移植などの造血幹細胞の移植は、治療効果が高い治療法として利用されています。

しかし、この細胞の移植に伴う重篤な合併症である移植片対宿主病（GVHD）が大きな問題となっています。

札幌医科大学医学部分子機能解析部門の小海康夫教授を中心とする研究チームは、この移植片対宿主病の患者の血中から病態の程度に応じ有意に上昇する新たなマーカーとして、ケモカイン分子である CCL8/MCP-2 を発見しました。

株式会社免疫生物研究所は、この研究成果を活かし、本分子を血中で定量できる測定キットを開発するとともに、札幌医科大学と共同で特許出願を行い、この度研究用試薬として販売を開始いたしました。

移植片対宿主病を判定する有効なマーカーは今まで開発されておらず、骨髄移植などの造血幹細胞移植後の CCL8/MCP-2 の測定は、今後本病態の発症診断ならびにモニタリングに有効であると期待されます。

【販売価格】

98,000 円/1 キット



（用語説明）

CCL8/MCP-2 : Chemokine (C-C motif) ligand 8 / Monocyte chemoattractant protein-2 (CCL8/MCP-2)は白血球などの遊走を引き起こし、炎症の形成に関与するケモカインと呼ばれる一種のタンパク質です。CCL8/MCP-2は、ヒトにおいては単球、線維芽細胞、上皮細胞から産生され、CD4+T 細胞、CD8+T 細胞、単球、NK 細胞等の細胞遊走活性を示します。

移植片対宿主病 : 英語では、Graft-Versus-Host-Disease、略して GVHD と称します。GVHD は、移植した造血細胞中に含まれる提供者（ドナー）の免疫細胞の 1 つである T 細胞が、患者（レシピエント）の体を異物と見なして攻撃し免疫反応を引き起こす合併症です。